オリヴァー・ラファージとアメリカ先住民
—文化人類学者・文学者・活動家の目から見た先住民政策—

社会システム研究科東アジア専攻
2012M50004　松尾 星璃佳

要　旨

本論文は、1920 年代から 60 年代初めまでのおよそ 40 年にわたって文化人類学者・文学者・活動家としてアメリカ先住民に関わり続けたオリヴァー・ラファージの人物史を追うものである。彼の血筋、経歴、文学作品、先住民政策に関する活動に光を当て、彼がアメリカ先住民の状況改善に取り組み続けた背景に、どのような思いや考えがあるのかを浮かび上がらせることに挑戦した。

実業家の曾祖父、芸術家の祖父、建築家の父の血を受け継いだオリヴァー・ラファージは、東部名門のグロートン・スクールやハーヴァード大学を卒業したのち、文化人類学者・文学者・活動家としてアメリカ先住民に関わり名を遺す人物へと成長した背景には、家族の影響があった。彼は先住民の血を 64 分の 1 とわずかながらも受け継ぎ、また昔から先住民と親交のあった父に自然の中で過ごす生活や先住民の知恵を学んでおり、幼いころから先住民に親しみを持っていた。また、母は子どもたちが本を読んでたくさんの知識に触れ、多くのことに興味を持ってほしいという思いで熱心に教育をおこない、ラファージにはグロートン時代にヘンリー・F・オズボーンの『旧石器時代の人々』をプレゼントした。彼はこの贈り物によって人類学の道へ導かれ、ハーヴァード大学で人類学を専攻した。ラファージは、大学の実地調査研究チームに所属し、実際にアメリカ南西部の保留地に足を運び、先住民と触れ合う機会を手にした。この時に出会った「文明化されていない」ナヴァホ族の人々に興味を持ったラファージは、これをきっかけに変容する先住社会を研究する文化人類学の研究者になることを決めた。彼は研究の合間に執筆した保留地での経験をもとにした小説を出版社に売り込み、1927 年、短編小説“North Is Black”が *The Dial* に掲載され、1930 年には、この短編小説と同じナヴァホ族をテーマにした中編小説 *Laughing Boy*（1929）がピューリッツァー賞を受賞した。このことは先住民関係の団体からも注目を浴び、同年、インディアン問題東部協会の代表を務める活動家のスタート地点に立ったのである。

ラファージにとってのアメリカ先住民は、変化にさらされながらも根本的には伝統的な生活や価値観を維持している人々で、ラファージがグロートン時代に経験した学校生活での疎外感や劣等感を忘れ、乗り越えさせてくれるもので、自身の人生の意味を肯定してくれる存在であった。また、実地調査で先住民の社会状況を目の当たりにしたラファージにとっては、彼らの劣悪な状況の改善を手助けしてやるべき存在であった。

ラファージが研究者・文学者・活動家の 3 方向からアメリカ先住民に関わり続けた背景には、彼が現地調査の過程で目にした先住民社会の現実や、彼らとの出会いで感じた異文化融合の難しさがあった。彼は実際に先住民と触れ合い感じたことや、そこで目にした先住社会の状況を作品の中に反映させている。例えば、短編小説“North Is Black”では、主人公の性質に、「素朴」で「単純」で「シンプル」な先住民という要素を盛り込み、中編小説 *Laughing Boy* では、先住民をアメリカ人化させる連邦政府の教育政策をヒロイン、スリム・ガールに投影している。

“North Is Black”と *Laughing Boy* からは、実際に先住民保留地で研究や調査を行い、先住民の人々と触れ合う中で、ラファージが異なる文化や価値観の融合の難しさを目の当たりにしたことが読み取れる。また、一方的に文化や伝統を破壊することへの疑念も提示している。さらに、異なる文化・慣習・価値観を融合するためには、それぞれの文化背景や伝統、慣習、価値観の理解を相互に深めた上で、互いに歩み寄ることが必要であるという考えが反映されている。

上記のような小説に投影された考えは、その後のラファージの活動の基盤になっている。ラファージは 1930 年代以降、アメリカ先住民は一合衆国市民としてアメリカ社会に存在すべきであるという考えを持ちながらも、先住社会や先住民の文化・伝統を破壊し、強制的かつ一方的にアメリカ人と同じ文化や慣習を受け入れさせようとする連邦政府主導の同化政策を強く批判した。

彼は上記のような考えをもとに、小説家として、読者に物語を介して先住民の状況に気づいてもらおうとした。一方活動家としては、最終的にアメリカ先住民が先住民にのみ与えられた特別な権利を手放し、他の合衆国市民と同じ権利や責任を持ち、彼らと同じように法の下の平等な保護が保障されることを目指し、アメリカ社会に訴え続けたのであった。

ラファージの活動の産物であるアメリカ・インディアン問題協会は、今日も先住民権利擁護の中心的団体として活動を続けている。また、現在もアメリカ先住民は、資源や聖地などの土地とその利用に関する権利や信教の自由に関して依然として多くの問題に直面しており、ラファージが目指した先住民の一合衆国市民化は実現しているとはいえないが、ラファージも携わったインディアン・ニューディール期の先住民政策は、先住民の文化や伝統の価値を再発見させ、アメリカの多文化主義に大きな影響を及ぼしたことは間違いないであろう。